

「いや、かねがね評判はうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほどふしぎなものだろうとは、じっさい、思いもありませんでした。ところでわたくしのような人間にも、使つて使えないことのないというのは、ごじょうだんではないのですか。」

「使えますとも。たれにでも、どうさなく使えます。——ただ——。」  
といいかけて、ミスラ君は、じつとわたくしの顔をながめながら、いつになくまじめな口調になつて、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術をならおうと思つたら、まず欲をすてることです。あなたには、それができますか。」

「できるつもりです。」

わたくしはこう答えましたが、なんとなく不安な気もしたので、すぐにまた後から言葉をそえました。

「魔術さえ教えていただければ。」

それでもミスラ君はうたがわしそうな目つきをみせましたが、さすがにこの上ねんをおすのはぶしつけだとも思つたのでしよう。やがておおように、うなずきながら、

「では教えてあげましょう。が、いくらどうさなく使えらうといつても、ならうにはひまもかかりませんから、今夜はわたくしの所へおとまりなさい。」

「どうもいろいろおそれいます。」

わたくしは魔術を教えてもらううれしさに、何度もミスラ君へお礼をいいました。が、ミスラ君はそんなことにとんじやくする気色もなく、しずかにいすから立ちあがると、

「御婆サン。御婆サン、今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」

わたくしは胸をおどらしながら、葉巻の灰をはたくのもわすれて、まともに石油ランプの光をあげた、親切そうなミスラ君の顔を、思わずじつと見上げました。

わたくしがミスラ君に魔術を教つてから、一月ばかりたった後のことです。これもやはりざあざあ雨のふる晩でしたが、わたくしは銀座のあるクラブの一室で、五、六人の友人と、だんろの前へじんどりながら、気がるな雑談にふけていました。

なにしろここは東京の中心ですから、まどの外にふる雨脚も、しつきりなく往来する自動車や馬車の屋根をぬらすせいとか、あの、大森の竹やぶにしぶくような、ものさびしい音はきこえません。

もちろん窓のうちの陽気なことも、明るい電灯の光といい、大きなモロッコ皮のいすといい、あるいはまたなめらかに光っている寄木細工の床といい、見るから精霊でもでてきそうな、ミスラ君の部屋などは、まるでくらべものにはならないのです。

わたくしたちは葉巻の煙の中に、しばらくは獺の話だの競馬の話だのをしていました。そのうちひとり友人が、すいさしの葉巻をだんろの中にほうりこんで、わたくしの方へふりむきなが